Vol.25

ゆうことみゆきのふくふくトーク

ソンコ de ソンコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた本田優子（札幌大学副学長）と村木美幸（アイヌ民族博物館専務理事）が、その魅力をソンコ（＝お便り）形式で語り合います。

イラスト／安田千夏

イランカラプテ（こんにちは）！

春、あちこちで挨拶が飛び交う季節。「イランカラプテ（こんにちは）」を北海道のおもてなしの合い言葉にする「イランカラプテ」キャンペーン、継続中です！沖縄の「メンソーレ」やハワイの「アロハ」のように定着したら素敵！

キャンペーンの一環としてJR札幌駅西コンコースにアイヌアートモニュメントが設置されました。その名も「ウレシパモシリ北海道イランカラプテ」。ウレシパは育てあう、モシリは大地という意味です。我が札幌大学ウレシパクラブが、本当に多くの皆様のご支援のおかげで、設置させていただくことができました。

クリムセ（弓の踊り）を舞いながら祈りを捧げるエカシ（長老）の木像の周囲に、重要な祭具イクパスイが六本。イクパスイは本来三十センチくらいの箆（へら）状の棒なんだけど、今回はモニュメントなので、百二十センチの巨大サイズ。エカシは、アイヌ木彫工芸の第一人者である藤戸竹喜先生（阿寒湖）が作られ、イクパスイは道東と日高地方二風谷のアイヌの方々六名の競作です。アイヌ芸術の高みを示すとともに、東西アイヌ協働の歴史的シンボルとも言えますね。

ところで、二月二日の設置セレモニーの直後に札幌雪まつりが開幕し、狙い通り海外からの大勢のお客様が像の前で記念撮影。でも、当初は日本語の解説板しかなかったから、ほとんどの人がイクパスイを見て、「What?」。しまいには、こう納得してたんだって。「OH! Snow Board!」（笑）。もちろん、すぐさま英語と中国語に翻訳した解説板を増設することにしました！

札幌駅でのアイヌアートモニュメントの設置セレモニー、私も行きましたよ。ウレシパクラブの学生たち、頑張ってたよね。一生懸命にアイヌ語で祈り詞を唱えながらトゥキ（酒杯）やイクパスイを持つ姿、オンカミ（拝礼）の動作も堂に入ってましたよ。モニュメントを制作した工芸家の皆さんをはじめ、たくさんの方が見守っていましたよね。学生たちの真摯な姿勢に熱いものを感じたのは私だけではなかったと思うよ。

我がアイヌ民族博物館では「イランカラプテ」キャンペーンが始まる以前から、あいさつの言葉として「イランカラプテ」を使っているの。すべての会話をアイヌ語で話すというのはハードルが高くて難しいけど、短いあいさつの言葉や案内放送をアイヌ語でアナウンスすることぐらいならできるよね、ってことで始めたの。来館者が多い日は朝から晩まで「イランカラプテ」のあいさつがあちこちで飛び交っていますよ。最初はみんなアイヌ語の発音に慣れなくて「イランカラプテ」と小声で恥ずかしそうにあいさつしていましたが、今ではすっかり板について、母音の付かない「p」の音もばっちり。継続は力なり…、ってところでしょうか!?

「ラジオでイランカラプテって聞いたよ」とか「テレビで見たけど、新千歳空港でもイランカラプテのイベントやってたよね」と声を掛けてくれる人も。そんな話を聞くと本当にうれしくなりますね。イヤイライケレ（ありがとう）。J

■本田優子（ほんだゆうこ）：金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸（むらきみゆき）：白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏（やすだちか）：神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。